

(題名) 京都大学学部生の喫煙率の推移

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻予防医療学分野 清原 康介

京都大学保健管理センター 川村 孝

奈良女子大学保健管理センター 高橋 裕子

背景 大学生の喫煙の実態はあまり知られておらず、特に専攻分野別の入学後の経年推移についてはほとんど明らかになっていない。

目的 本研究は、本大学学部生の喫煙率の推移を多面的に検討することを目的とする。

方法 2000～06年の各年に行われた京都大学学生定期健康診断時に回収された生活習慣に関する調査票の結果から、男女別の喫煙率を年度ごとに算出した。また、2000～03年入学者のデータを併合して入学時～4年次の喫煙率の推移を性・学部・入学時年齢別に集計した。喫煙者は本数に関わらず現在喫煙する者とした。

結果 2000～06年の男性喫煙率は17%から9%へ、女性は3%から1%へと、男女とも徐々に低下した(図)。2000～03年入学者の在学中の喫煙率を学部別・入学時年齢別に見ると、医療技術短期大学部(医短)に20歳以上で入学した者は、入学時の喫煙率が男性29%、女性7%と際立って高く、在学期間を通して最も喫煙率が高かった。一方、医短に18歳で入学した者の入学時の喫煙率は男女とも0%、19歳で入学した者は男性6%、女性2%であり、他学部の同年齢者と大差なかったが、在学期間中の喫煙率の上昇はより顕著であった。この結果、全体として医短の喫煙率は期間を通して他学部より顕

著に高かった。また、医学部医学科の男性喫煙率は入学時から2年次にかけて微増してその後は低下する傾向にあり、女性喫煙率は入学時～4年次まで常に0%であった。この結果、全体として医学部医学科の喫煙率は期間を通して全学部中最も低かった。

結論 近年本大学の喫煙率は徐々に低下しており、喫煙しない風潮が浸透してきていることが示唆されたが、2003年の健康増進法施行以降に急激に喫煙率が低下したわけではなく、法施行の直接の効果は不明であった。また、医短と医学部医学科は共に医療に関する教育を受けながら、喫煙率の推移に大きな隔たりがあった。医短には入学時から喫煙者が多く、その後の喫煙率の上昇も顕著であったことから、同学年に喫煙者の多い環境がさらに喫煙者を増やす可能性があると考えられた。

(図) 京都大学学部生の喫煙率の推移(2000-2006年)

